

いずみさの昔と今 第370回

「政基公旅引付」にみる重陽の節句

9月9日は五節句のひとつである重陽の節句です。1月7日の人日の節句（七草粥）、3月3日の上巳の節句（ひな祭）、5月5日の端午の節句（こどもの日）、7月7日の七夕の節句と比べると、この重陽の節句は今では影が薄い印象を受けますが、他の節句と同じく長い歴史があります。飛鳥時代には日本に既に伝わっており、平安時代には菊を愛で、文人たちが漢詩を作る宴が開催されていました。その後は廃れる時期がありつつも、「政基公旅引付」の時代にも菊を愛でて漢詩や和歌を作る宴が開かれています。

さて、「政基公旅引付」にも毎年重陽の節句についての記述があります。中でも文亀元年（1501）年の記述が最も詳しく記されています。この記事の内容は政基への贈り物・酒宴・和歌の三つに分けることができます。

まず政基への贈り物です。無辺光院の僧侶や大木村や船淵村の番頭たちが酒・餅・松茸を政基が滞在する長福寺に持参しています。酒は宴に必須なもので、餅は年中行事全般とのかかわりが深いもの、松茸は季節の食材です。なお無辺光院の僧は翌年にも酒と松茸を持参していることから、これらが重陽の節句に際して比較的良好に贈られる品であったことがうかがえます。

次に酒宴です。宴とするには小規模ですが、政基は贈り物を持参した無辺光院の僧侶を呼び寄せて酒を与えています。またおそらく政基は参加していましたが、この日は一日長福寺の政基の部下たちの詰所でも酒宴が行われています。古代より重陽の節句時の酒宴では菊の花を浸した酒が飲まれており、この時の宴で飲まれたのも同様の酒だったのかもしれない。

最後に和歌です。重陽の節句に際して政基は和歌を詠んでいます。文亀元年の「我ここにすむ長月のけふなれば八重のしら菊九重にさけ（私がここに住んで迎えた9月9日という今日この日なので、白い八重菊よ九重になるほど沢山咲きなさい、また宮中にも咲きなさい）」と、

文亀3年の「千とせそと菊の白露秋をへてこの山路にも袖ふれにけり（私の服の袖が濡れているのは、千年もの寿命を得ることができるといふ菊の朝露が、秋になりこの山路を歩いていて袖にかかったものなのです）」の二首です。いずれも菊を題としたもので、前者は九重すなわち宮中が盛り込まれており、後者は京都にいられない自身の境遇を嘆いたものと理解できます。いずれも京都での行事と同様に菊を愛でつつも、住み慣れた都への想いが滲み出る、そんな和歌といえるでしょう。

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌平日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

泉佐野 レトロ タイムスリップ

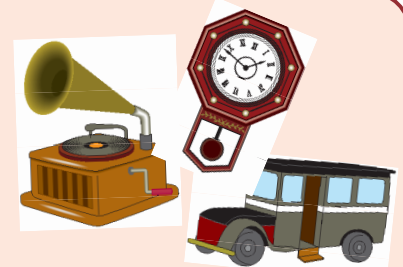
泉佐野市の昭和頃の懐かしい写真を紹介します。

②8学校シリーズ(8) 大木小学校



▲昭和30年ごろの大木小学校。大木小学校は明治8年に創立されました。

▼昭和48年の大木小学校。昭和40年に給食室が新築されました。



▲現在の大木小学校の校舎。旧校舎の老朽化により、平成13年に新校舎が竣工しました。新校舎は、木のぬくもりや温かさがわかるような木造校舎となっています。

泉佐野市の懐かしい写真は「泉佐野市デジタルアーカイブ (<https://adeac.jp/izumisano-city/top/>)」でも公開中！